

第23回 I一紅会 歴史研究同好会

「甲府宰相・忠長 高崎にて死す」

～徳川政権確立期の裏面史～

(講演要旨)

徳川家康が築いた徳川政権を継いだ秀忠の次男、忠長。

若くして英才の誉まれ高く、凡庸な嫡子家光よりも次期将軍にとの噂が流れた。

だが、祖父家康は長子相続の慣例に従い、家光が次期将軍と決定した。

忠長は甲斐25万石を領有し「甲府宰相」と呼ばれ、家光に次ぐ家格と待遇を与えられたが、その後の忠長の歩みは屈折したものとなる。

そして、家光は父秀忠の死を契機に、忠長を「悪行」「非道」を理由に上州・高崎に追放、そして自害を命じる。

没年寛永10年、28歳の若さであった。

「生まれながらの将軍」と言われた家光政権確立期の姿を抹殺された忠長の悲劇を通して見つめてみたい。

(内容)

○ 二代将軍秀忠と生母お江

秀忠（1579－1632）（天正7－寛永9）

家康三男 母西郷局

正妻お江（信長の姪）秀吉の命令で1595年に秀忠と結婚、

秀忠17歳、お江23歳、まさに政略結婚であるが二男五女をもうける。

関が原の戦い（1600）の後、慶長10年（1605）28歳で二代将軍となる。

長男家光の誕生、1604年（慶長9年）

二男忠長の誕生、1606年（慶長11年）、2歳の差。

その才が周囲から比較評価される運命にあった。

○ 次期将軍は？

家光（竹千代）の軽度の発達障害と吃音。

次男忠長（国松）の俊才ぶりに周囲が期待。

秀忠も一時は国松に相続をと考えた。

竹千代の乳母春日局の家康への嘆願。

伊勢参りと称して、駿河を訪れて、長子相続の決まりを申し出る。

家康の決断によって、家光の次期将軍への道が決定。

○ 家光の将軍職就任

元和7年（1623）、家光20歳で第三代将軍となる。

秀忠、しばらく大御所として政務を担当。

家光の将軍就任はまさに「生まれながらの将軍」

徳川幕府の基礎固めを重臣とともに、始動。

秀忠の死、寛永9年（1632）、大御所政治の終了。

遺言として、「法と制度の整備」を家光に託す。

西国大名の動向を気にしながら死んだ家康との違い。

○ 忠長の処遇

元和2年（1616）9月、甲斐一国25万を拝領。

忠長、11歳。

甲斐領有により、「甲府宰相」と称される。

元和4年（1618）、元服。

家康の政治顧問の金地院崇伝によって「忠長」と改名。

忠長、江戸城本丸に屋敷を与えられた。

忠長付きの小姓、春日局の末子稲葉正利。

甲斐には、奉行として武田家旧臣が派遣される。

○ 忠長の治世

元和5年（1619）紀伊に移った徳川頼宣に代わり、

忠長、寛永元年（1624）に駿河も領有、甲斐など合わせて55万石の大領主となり、「駿河大納言」とも称された。

御三家（尾張・紀伊・同格、水戸の叔父である頼房より上位）の家禄となる。

東海道の要である駿河で西国を抑える役割。

○ 忠長の奇行

寛永8年、家臣の子や坊主を殺害し、翌日に2人を呼び出すという行為から忠長の奇行が始まる。

多くの家臣たちが恐怖を感じるほど奇行が重ねられる。

家光の憂慮。

更生を促がすために、重臣を派遣。

そのたびに、忠長は改心を誓うが奇行は続く。

○ 忠長への疑惑、そして処断

家光の決断。

甲府への蟄居を命じる。

忠長の乱行に関する諸説。

將軍の座を奪われたことへの怒りを覚えての反逆説。

熊本藩の領主加藤忠広の改易と関連しての処断説など。

家光による大名統制の一貫として、忠長が処罪されたことは事実。

家光の晩年までの大名統制。

外様大名では 加藤家を含めて29家（276万6300石）

徳川系大名では、忠長とその一統、さらに美濃加納、出羽山形の譜代諸藩を改易。

晩年には譜代、徳川一門を中心とする新しい領国体制が確立される。

○ 忠長の最後

大御所秀忠の死、寛永9年1月（1632）

『生母のお江は、寛永3年（1626）に死去している』

家光は同年10月、忠長を高崎に追放。

高崎城に幽閉された忠長は自身の運命を覚り、

寛永10年（1633）12月6日自刃。享年28歳。

菩提寺は高崎城下の大信寺。

後の延宝3年（1675）4月、忠長を弔う宝塔が建立された。

(以上)

(参考)

徳川忠長関連年譜

天正元年 (1573)	母お江、誕生
天正9年 (1579)	父秀忠 誕生
18年 (1590)	秀吉 小田原攻め 北條氏滅亡
文禄元年 (1591)	文禄の役 朝鮮出兵
文禄4年 (1595)	秀忠 お江との婚姻 (秀忠17歳 お江23歳)
慶長2年 (1597)	慶長の役 第2朝鮮出兵
慶長3年 (1598)	秀吉の死
慶長5年 (1600)	関が原の戦い
慶長8年 (1603)	家康 幕府を開く
慶長9年 (1604)	家光 誕生
慶長10年 (1605)	秀忠 第2代将軍となる
慶長11年 (1607)	忠長 誕生
元和元年 (1615)	大阪夏の陣 豊臣氏滅亡
元和4年 (1618)	家光、忠長 元服 忠長、甲府領主となる 25万石領有
元和7年 (1623)	家光、第3代将軍となる
寛永元年 (1624)	忠長 信濃小諸を合わせて駿、遠、甲斐50万領有 (駿河で忠長の奇行始まる)
寛永3年 (1626)	母 お江、死去
寛永9年 (1632)	父 秀忠、死去
同年 10月	家光、忠長を高崎へ追放
寛永10年 (1633)	忠長、高崎にて自刃
寛永14年 (1637)	島原の乱
寛永15年 (1638)	原城落城 島原の乱 終結

～以後、家光の治世は、慶安5年(1651)まで続く～